【ポスター発表】

社会福祉士養成教育における実習生のコンピテンシーと相談援助演習における学び

－コンピテンシー自己評価による相談援助演習の効果と課題の検討－

○　関西福祉科学大学　　氏名　柿木　志津江（会員番号 4238）

橋本有理子（関西福祉科学大学・4381）、小口将典（関西福祉科学大学・5253）

清原舞（関西福祉科学大学・5924）、中島裕（関西福祉科学大学・2117）

得津愼子（関西福祉科学大学・2035）

キーワード：社会福祉士、コンピテンシー、相談援助演習

１．研 究 目 的

本研究の目的は、社会福祉士養成教育における実習生のコンピテンシー（課題を解決するための能力や技術）の現状の把握を通して、相談援助演習（以下、演習）の効果や課題を明らかにすることである。厚生労働省の示すシラバスによると、演習は相談援助実習（以下、実習）と相互に関係するものと捉えられ、演習におけるさまざまな学びが、これから実習に臨む実習生にどのように影響しているのかを明らかにすることは重要である。

橋本ら（2015）の研究では、演習をこれから履修する実習生と、演習を履修済みの実習生とのコンピテンシーの比較を通して演習の効果について検討している。本研究では同じ実習生を対象に、より深く演習履修前後のコンピテンシーを比較検討することで、変化や成長が確認できると考えた。

２．研究の視点および方法

実習生のコンピテンシーの現状の把握は、種村ら（2015）によって作成されたコンピテンシーシートを用いて行った。このコンピテンシーシートは、演習と実習との連動を重視し、Ａ大学におけるこれらの科目のシラバスを反映するとともに、実習生、実習指導者、養成校教員の三者協働による評価を意識して作成されている。コンピテンシーシートは 6 カテゴリー77 項目（「基本的学習能力」13 項目、「社会的能力」21 項目、「価値」8 項目、「知識」16 項目、「技能」8 項目、「実践的能力」11 項目）から構成されている。それぞれの項目について「まったくできていない」から「とてもよくできている」の 5 件法で求めた。なお、Ａ大学では 2 年次春学期に相談援助実習指導（以下、実習指導）Ⅰおよび演習Ⅰ、2 年次秋学期に実習指導Ⅱおよび演習Ⅱ、3 年次春学期に実習指導Ⅲ、3 年次夏季休暇に実習、3 年次秋学期に実習指導Ⅳおよび演習Ⅲを履修する流れになっている。演習はⅠ・Ⅱ・Ⅲがあるが、本研究では実習の事前学習を担う演習Ⅰ・Ⅱに着目した。

調査方法はＡ大学の実習指導ⅠおよびⅡの授業において、集合調査を行った。調査はそれぞれの初回授業と最終授業の計 4 回実施したが、本研究では実習指導Ⅰの初回授業と実習指導Ⅱの最終授業で実施した調査のデータを用いた。つまり、演習Ⅰをこれから履修する時点と演習Ⅱの履修が終了した時点でのコンピテンシーを比較した。

なお、実習生のコンピテンシーと演習の関連については、Ａ大学の演習ⅠおよびⅡのシ

ラバスを用いて検討した。

３．倫理的配慮

調査の実施にあたっては、毎回、研究協力に不同意であっても不利益を被ることはないこと、得られたデータは研究の目的にのみ使用すること、個人が特定されることはないこと等書面および口頭にて説明を行い、同意が得られた実習生のデータのみを使用している。

なお、本研究は、関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認を得ており（承認番号 14-40）、日本社会福祉学会倫理規定を遵守している。

４．研 究 結 果

本研究においては、2015 年度の実習指導Ⅰの初回授業および実習指導Ⅱの最終授業で実施した調査ともに研究協力に同意が得られた実習生 88 名を分析対象とした（再履修者および編入生除く）。実習指導Ⅰの初回授業のコンピテンシーと実習指導Ⅱの最終授業のコンピテンシーを比較するため、データに対応のある t 検定を行った。

分析の結果、77 項目すべてにおいて平均値は上昇していた。実習指導Ⅱの最終授業において平均値が 3.0 未満の項目もあり、「知識」や「技能」のカテゴリーにおいて多くみられた。演習Ⅰで学ぶ価値や倫理、コミュニケーション、面接、記録、演習Ⅱで学ぶアセスメント、支援計画の作成、社会資源に関する項目では有意な変化が認められ、1 年間の学修の成果がうかがえた。しかし一方で、「社会的能力」および「実践的能力」において有意な変化が認められなかった項目が多くみられた。

５．考 察

「社会的能力」では自己覚知やコーピングスキルに関する項目で有意な変化が認められなかった。これらは演習Ⅰ・Ⅱで実施しているが、演習も含めカリキュラムにどのように反映していくかが課題といえよう。「実践的能力」に関する項目は、演習Ⅰ・Ⅱではなく実習以降で学ぶことが想定されており、実習および事後学習の成果を注視していく必要がある。また、有意な変化が認められなかったこれらの項目に加え、平均値の低かった「知識」や「技能」について、実習経験を持たないことから項目によっては当然の結果ともいえるが、同時に実習生としてであっても、自身の振る舞いや知識の乏しさが利用者に影響を及ぼすことを実習生が理解し、向上の必要性を認識して主体的な学びにつなげていくことが重要である。

引用・参考文献

種村理太郎他（2015）「社会福祉士養成教育における実習科目と演習科目との連動を重視したコンピテンシー・モデル（福科大版）の検討」『関西福祉科学大学紀要』19、13-25

橋本有理子他（2015）「コンピテンシーにみる社会福祉士養成課程実習生の学修の現状と今後の展望－コンピテンシーシートを用いた実習生による自己評価の結果をふまえて－」『関西福祉科学大学紀要』19、59-71

※本研究は、平成 27 年度関西福祉科学大学共同研究（一般公募）の研究成果の一部である。